

学位論文審査結果の要旨

令和 7 年 2 月 15 日

学位論文題目： 日中韓で使用される伝統医学の比較 ～処方成立時期を中心にして～

学位申請者 李鵬遠

審査委員 主査 新井一郎

副査 袴塚高志

副査 山路誠一



漢方医学は、中国に起源をもち、随時、その時代の最新の中国医学理論と処方が我が国に伝えられ、用いられてきた。しかし、我が国では、江戸時代の古方派の台頭により、傷寒論・金匱要略の処方が主に使われるようになったと言われている。しかし、そのことを、データをもって証明した研究は行われていない。また、韓国においても、韓医学という名前で、中国起源の伝統医学が現在も用いられているが、現在の韓医学の状況を処方から分析することは行われておらず、また、日本・中国との使用処方の比較も行われてない。

本研究は、現在の日本と中国、韓国において実際に使用されている処方の成立時期を調査・分析することで、日本・中国、韓国の伝統医学の現状および関係を明らかにすることを目的に実施されたものである。

申請者は中医であり、長年、中国で実際の臨床を体験してきている。その基礎知識・経験をベースに、本学大学院で新たに学んだ漢方・漢方薬の知識、また、共同研究者から提供された韓医学の情報を、「現在使用されている処方の成立時期」という統一した視点で分析することで、3つの伝統医学の現状とお互いの影響を明らかにすることに成功した。また、中国では日本より処方の生薬量が一般に多いことが知られているが、本研究は、同一処方における生薬量についても調査・比較が行われた。

結果は、今まで言われていた「わが国では、漢代の傷寒論・金匱要略の処方の使用が多い」ことを、データをもとに明らかにした上で、古方派成立以後の中国清代の処方の使用が極めて少ないこと、わが国で多くの独自処方が創製されていることなどを明らかにした。また、韓国では、『東医宝鑑』をもとに韓医学の独自性が語られることが多いが、現在、使用されている処方の種類からは独自性は少なく、また、現在の中医学に使用処方に近いことが明らかになった。

わが国では、一般の人々においては、漢方と中医学が同じようなものとして語られることが多いが、本研究は、両者は混同して語られるべきでないということを示したものであり、価値が高い。

本研究は、処方名の発音（英語表記）が3国ですべて異なり、英語で論文文化することは極めて難しく、また、研究の成果を読んでもらう上でも適していないと判断したため、漢字表記が許される日本薬史学雑誌へ投稿され、専門家による査読も実施された上で掲載が認められたものである。

また、これに先立ち、日本東洋医学会においてオーラル発表を行っている

李鵬遠, 新井一郎. 日中韓で現在使用されている伝統医学処方の成立時期の比較. 第 73 回日本東洋医学会学術総会. 2023 年 6 月 17 日, 福岡.

学位論文発表会における発表もわかりやすいものであり、評価できる。

以上のことから、申請者は、今後、薬学研究者として、自立して研究を計画・実施・報告できる能力を有していると考えられるため、薬学（博士）に値すると判断できる。